



2017年4月 第15巻第4号

かく語りき—聖人の言葉

「非常に得難い、人間としての生を受けながら今生で神を悟ろうとしない者は、生まれても無駄に終わるのだ」

(シュリー・ラーマクリシュナ)

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」

(抜粋：マタイによる福音書 6章33節。『和英対照聖書 新共同訳』日本聖書協会、2001年)

今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・2017年5月の予定
- ・2017年3月の逗子例会でシュリー・ラーマクリシュナ生誕182周年祝賀会を開催
- ・2017年3月の逗子例会 シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会

「シュリー・ラーマクリシュナを知る」 スワミー・メーダサーナンダの講話

- ・マハーラージ、韓国と中国で講話
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

今月の予定

- ・生誕日

お釈迦様 5月10日(水)

- ・協会の行事

5月6日(土) 10:00~12:00

東京・インド大使館例会

講義：『バガヴァッド・ギーター』
(無料)

場所：インド大使館

お申込み・お問合せ：

<http://www.gita-embassy.com/>お問合せ/
せ/

※入館・受講するには、大使館発行のIDカードが必要です。詳細は協会のウェブサイトの「インド大使館ID」(ホームページ左側のメニューにあります)

をご覧ください。

※免許証など写真つきの身分証を必ずお持ちください。

5月7日(日)、14日(日)、21日(日)、
28日(日) 14:00～15:30

ハタ・ヨーガ・クラス

場所：逗子本部別館

お問い合わせ：080-6702-2308(羽成淳)

※体験レッスンもできます。

※予定は変更されることもありますのでお問合せください。

※専用ホームページをご覧ください：

<http://zushi-hatayoga.jimdo.com/>

5月9日(火) 14:00～16:30 ※予定
は変更されることもあります。

火曜勉強会

場所：逗子協会本館

お問い合わせ&お申込み：

benkyo.nvk@gmail.com

5月20日(土) 10:00～12:00

『ウパニシャド』 スタディークラス

講義：ウパニシャド(無料)

場所：インド大使館

お申込み・詳細：

<http://www.gita-embassy.com/>お問合せ/
せ/

※入館・受講するには、大使館発行のIDカードが必要です。詳細は協会のウェブサイトの「インド大使館ID」(ホームページ左側のメニューにあります)をご覧ください。

※免許証など写真つきの身分証を必ずお持ちください。

5月21日(日) 10:30～16:30

逗子例会

場所：逗子協会

お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

5月26日(金)

ホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動

現地でのお食事配布など。

お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

5月27日(土) 13:30～17:00

関西地区講話

場所：大阪研修センター

内容：「バガヴァッド・ギーターとウパニシャドを学ぶ」

※詳細はこちら

<http://vedanta.main.jp/index.html>

5月28日(土)

スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会

場所：東京・インド大使館

テーマ：統合的ヨーガへの気付き

特別講師：「日本ヨーガ療法学会」木村慧心先生ほか

※詳細は、協会のウェブサイトをご覧ください。

※インド大使館の保安上の理由から、今年はお参加いただくのにEメールによる事前のご予約が必要です。詳細は、

協会のウェブサイトをご覧ください。
協会に電話でお問い合わせください。

(本メールの最後に協会のウェブサイト URL、電話番号が掲載されています。)

2017年3月の返子例会でシュリー・ラーマクリシュナ生誕 182 周年祝賀会を開催

3月19日(日)、日本ヴェーダータ協会は3月の返子例会にてシュリー・ラーマクリシュナ生誕 182 周年を祝う全日の祝賀会を執り行いました。この祝賀会は、協会の年間行事の中で最も出席者の多い行事です。

午前5時、協会本部のシュラインにボランティアの方々が到着し始めました。午前6時、シュラインの明かりが点灯し、スワミー・メーダサーナンダジー(マハーラージ)の先導でマンガラ・アーラティ、聖句詠唱、『バガヴァット・ギーター』の輪読、賛歌朗唱が行われました。

その後、朝食の際に、この日の役割分担の確認が行われました。本館2階の集会室では、シュリー・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの写真に掛けるガーランド(花輪)、祭壇用の生花、果物などの供物の飾り付けが行われました。

開始予定時刻の午前10時30分、祝賀会の会場である別館は参加者で埋まり始め、儀式の始まりを待ちながら歓談する声があちこちから聞こえてきました。しばらくすると、マハーラージは静粛を呼びかけ、祭壇の飾り付けをもう一度確認して祭壇に拝礼すると、儀式用の台上に上がりました。ホラ貝の音がプージャー(礼拝)の開始を告げ、マハーラージがマントラ(サンスクリットの聖語、真言)を唱えながらプージャーを執り行いました。儀式の途中でマハーラージが時折振鈴(しんれい)を鳴らすと、それに合わせて、最前列にいる参加者の数人がホラ貝を吹き鳴らしました。

プージャーが終わると、続いて、地球の五大構成要素である火、水、エーテル、空気、土を象徴する供物を奉獻し、アーラティを行いました。参加者は、シャンティ泉田さんのシンセサイザー伴奏に合わせて賛歌「カーンダナ・バーヴァ・バーンダナ(Khandana Bhava-Bandhana)」を斉唱しました。次の「サルヴァ・マンガラー・マンガレー(Sarva Mangala Mangalye)」はマハーラージも一緒に歌いました。

そして、プシュパンジャリ(花の奉獻)のための花つぼみと葉が参加者に配られました。人数が多いため少し時間がかかりましたが、配布が終わると全員起立し、マハーラージの先導でシュリ

ー・ラーマクリシュナに捧げるプシュパンジャリのマントラを詠唱しました。

ここで、祭壇に捧げられた食物が下げられ、昼食のプラサードとして振る舞うために本館の台所に運ばれました。参加者からプシュパンジャリの花と葉が集められる間、儀式用の台の上にはホーマ（護摩焚き）の道具が準備され、火にくべる供物や温められたギーなどが用意されました。

ホーマが始まると、すぐに炎が燃え上がりました。マハーラージの呼びかけで参加者は108回のマントラを唱和し、マハーラージは炎を調節しながら儀式を進めていきました。部屋の中に煙が立ちこめ始め、窓やドアが開けられました。マハーラージは立ち上がって火にギーや果物をくべ、再び座ってもう少し供物をくべると、用意してあったヨーグルトを炎の上にかけました。火はもうもうと煙を上げながら消えていきました。マハーラージはホーマの灰でビブーティ（聖灰）を作り、1列に並んだ参加者一人ひとりの眉間にビブーティを小さく塗りつけました。

これで午前のプログラムが終了しました。参加者は本館と別館に分かれて、昼食のプラサードをいただきました。

午後2時45分から、午後のプログラムが再び別館で行われました。マハー

ラージは、午前のプログラムに参加しなかった人たちのために、午前の礼拝の内容を簡単に説明しました。

続いて、聖句詠唱、『ラーマクリシュナの福音』の英語版・日本語版を輪読し、ミタ・チャンダさんがクリシュナの賛歌をアカペラ（無伴奏）で歌いました。次に、マハーラージがシュリー・ラーマクリシュナについての短い講話を英語で行い、横田さつきさんが通訳しました。（講話は本号に掲載）

そして、特別音楽プログラムが行われ、協会の信者さんのグループとヨガスクール・カイラスの皆さんがそれぞれオリジナルの日本語の賛歌を披露し、ロニー・ハーシュさんが英語の賛歌を歌いました。最後に、インドの伝統楽器バーンスリー（竹製の横笛）奏者の寺原太郎さんが、奥様のタンプーラ（インドの弦楽器）とディネシュ・ディヨンディさんのタブラ（インドの太鼓）とのアンサンブルで素晴らしい演奏を披露し、参加者を魅了しました。この日の参加者は約130名でした。

今回もいつもと同じく、たくさんのボランティアの方々に事前の準備や当日の様々なお仕事をお手伝いいただきました。心より御礼申し上げます。





2017年3月の返子例会 シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会

「シュリー・ラーマクリシュナを知る」 スワーミー・メーダサーナンダの講話

「ラーマクリシュナとは誰か」を説明するのは難しいものです。もちろん、ラーマクリシュナは偉大な人物であり、偉大な聖者です。神の偉大な信者でもありますし、偉大なギャーニ、偉大なヨーギーでもあります。『ラーマクリシュナの福音』を執筆したマヘンドラナート・グプタ、通称「M」さんは、シュリー・ラーマクリシュナがどのような人か明らかにしたいと考えていました。が、やってみたらものの、結局は諦め、次のような美しい言葉を残しま

した。「無限の存在であるシュリー・ラーマクリシュナを解き明かすのは、とても難しい。」私達人間の知性は有限であり、無限のラーマクリシュナは人間の有限の知性を超えているから、人間の能力で捉えるには無理なのです。

皆さんの中には、「Mさんはシュリー・ラーマクリシュナの信者だから、このように言うのだ」と思う人もいるでしょう。そう思う方はぜひ、「ラーマクリシュナは誰か」を考え、どのような結論に達するかやってみてください。私やMさんが言うことを正しいものとして受け入れる必要はありません。皆さん自身が考え、追求して行くべきことなのです。いずれにしてもこのテーマは非常に興味をそそられます。考え始めたら「ハマる」可能性が大ですから気をつけてください。「ハマりたくない」という人は、初めから考えない方がいいですね。ラーマクリシュナは猛毒のコブラのようなもので、噛まれたら一巻の終わりです（笑）。普通のヘビに噛まれたら死にますが、シュリー・ラーマクリシュナというヘビに噛まれると不死になります。ここが大きな違いです。皆さん、有限の命でいるのと不死になるのと、どちらがいいですか。

シュリー・ラーマクリシュナをよく知るには、『福音』を研究するのが最も良いでしょう。この本は実際の言葉を

そのまま記しており、説明ではありません。専門用語や解釈の必要もありません。シュリー・ラーマクリシュナが言ったことを直接「聞く」ことができます。『福音』を学ぶことは、神様と向き合って座るようなものです。瞑想も苦行も必要ありません。神様の前に座りたいと思うのなら、『福音』を単に「読む」のではなく「勉強」してください。読むだけでは表面的になってしまう可能性があります、勉強することで深く理解できます。

物語を読むのとは違います。物語のような本は、読んだらどこかにしまって、すぐに内容を忘れてしまいます。が、『福音』は忘れることはできません。勉強し始めた途端、じわじわと毒が回り始めます（笑）。そしてある日、毒にやられたのを感じるのです。そうになると、もう後戻りはできませんから、前に進むしかありません。『福音』に出てくる例え話や物語は、分かりやすく面白だけでなく非常に深い内容で、意識下に入り込み潜在意識に影響を与え続けます。そして人を変えるのです。『福音』を学び始めると、学ぶ以前とは違う人になります。変わったことに気付かないかもしれませんが、変化は必ず起こるのです。

ちょっとした例え話だが実は非常に深い、という例を挙げましょう。ご存知の通り、ヒンドゥ教徒は、神様は天

国と呼ばれるはるか彼方に住んでいらっしゃるのではなく、私たちのハートの中にお住まいだと信じています。このようなごく近い所に、魂という形を取って神様はいらっしゃるのです。魂は、サンスクリットで「アートマン」と呼ばれます。こんなに近くなのに、なぜ神様は見えないのでしょうか。それは、「マーヤー」、すなわち霊的無知のせいです。マーヤーは英語で「illusion（幻惑）」と訳されることがありますが、この言葉は真の意味を十分に伝えていません。「spiritual ignorance（霊的無知）」や「mystic illusion（神秘的幻惑）」と言った方が良いでしょう。いずれにしても、このマーヤーのせいで、「最も近いものよりもっと近くに」あるものを私たちは認識できないのです。

このことについてシュリー・ラーマクリシュナは、『ラーマーヤナ』からの引用を例えにして美しく説明しています。王子ラーマは即位の直前、父であるダシャラタ王が以前に交わした約束を果たすために森に送られました。ラーマは、妻のシーターと弟のラクシュマナと共に、14年間王国から追放されたのです。森の中ではシーターを守らなければなりませんから、歩く時にはラーマが先頭に立ち、シーターが真ん中を、ラクシュマナが一番後ろを歩きました。シュリー・ラーマクリシュナはこの話を使って、私たちに神様が見

えないのはマーヤーのせいだというイメージを説明したのです。先頭に行く神の化身ラーマが私たちのアートマン、最後尾のラクシュマナは肉体に入って人間になった魂ジヴァ、真ん中にあるシーターがマーヤーです。ラクシュマナにラーマが見えないのはシーターがいるから。私たちに内なるアートマンが見えないのはマーヤーがあるから、ということです。

『福音』を読むと、日常生活の出来事を題材にした素晴らしい例え話がたくさん用いられていることや、聖典の引用がほとんどないことに気がきます。日々の生活を基にしたこれらの例え話は大変分かりやすいと同時に、非常に深みがあります。実際のところ、『福音』を学べば学ぶほど自分の深みが増し、自分の深みが増すと『福音』の内容の深い意味をいっそう理解するようになります。

霊的实践は実際にやってみるといろいろな壁に突き当たるものですが、家住者にとっては特にそうだと言えます。「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」に代表されるように、聖典には「万人を愛せよ」という記述がありますが、このような言葉に戸惑う人もいるでしょう。「悪い人たちも愛すべきなのだろうか」という疑問が湧きますね。悪い人の中にも神様がいるのだから、悪い人も区別することなく

つき合うべきなのではないでしょうか。シュリー・ラーマクリシュナはこれに対し、こうアドバイスしています。「噛んではいけないが、ヘビのようにシューシューと音を出して脅かしなさい」、すなわち、他者を傷つけてはいけないが自分が傷つけられないように脅かして自分を守るのです。

家住者としての生き方について例え話はたくさんありますが、問題は、私たちがそれを深く理解しようとしません。たとえば、シュリー・ラーマクリシュナは「水に浮かぶボートのように世間を生きなさい」と言いました。ボートは水の上にあるから浮かぶのですが、水がボートの中に入ってきたらどうなるのでしょうか。同様に、世俗に生きることは何も悪くないのですが、世俗を自分の中に入れてはいけません。水の上にあるボートと水の中にあるボートは違います。この考え方は、実践してみると難しいのが分かります。人生や、家族との生活を楽しんでください。ただ、「これも消える」のだということを常に忘れずにいてください。時折、私たちはこう考えます。「毎日を今日のように過ごしていけばいい。問題のない、快適な人生だ。こうやっていけばいいんだ。」

ビジョイ・クリシュナ・ゴースワミーという有名な聖者が、よくこう言っていました。「今日という日も消えゆく。」

あらゆることを楽しんでいいのです。ただし、「今日という日も消える」のだということを忘れてはいけません。良い日も消え、悪い日も消えます。今生も消えます。解脱し自由を得るまでは、そうなのです。ヒンドゥ教では「解脱」が理想であり、解脱とは天国に行くことではありません。もちろん地獄に行くことでもありませんが。解脱するまで、私たちの「生」は続くとされています。ですから、解脱の時が来るまで「これも消える」のだということを忘れずにいましょう。そうすれば、無執着でいられます。今生も、この家族も、若さも、年老いたことも、ヴェーダーンタ協会も、ラーマクリシュナ・ミッションも、仏教も、日本も、男としての生涯も、女としての生涯も、サラリーマンの生活も、定年退職の生活も、すべてはやがて消えるのです。ただ一つのことだけが真実です。解脱し神と合一すること、真理との合一。これだけです。

マハーラージ、韓国と中国で講話

3月9日（木）～15日（水）、マハーラージは韓国・ヨンウォルと中国・上海を訪問しました。11日（土）～12日（日）には、Silver Lining Associationの主催する2017 Yeongwol International Hope Concert and International Yogaにご招待いただき、開会の祝辞を述べ、「ポジティブな生

き方」についての講話を行いました。また、マハーラージは同団体の依頼に応じて以下のメッセージを送りました。

「現代文明は、生活のペースが速まり、感覚への刺激が増え、競争が激しくなり、結果的に平安の喪失が広まって人々は精神的にも霊的にも影響を受けています。西洋の優れた実践性に東洋の叡智を合理的に統合しないと、ミクロ（個）とマクロ（普遍）の両方のレベルでバランスのとれた文明を作り上げることは不可能でしょう。東洋の叡智が重視するのは人生に明確な目的を持つことであり、これは人生そのものを満たしてくれることから、肉体、心、霊性に等しく重きを置く生き方を勧めています。

この生き方は、2015年に国際連合総会で『国際ヨーガの日』の実施が決定され、世界的に認められました。ヨーガに基づいた、このホリスティック（holistic、全体的・総合的）な生き方は、インドで始まりましたが、今では世界が注目するテーマとなりました。

2017年3月10日から3日間、Silver Lining Associationがヨンウォルにて国際的なセミナーを開催されると知り大変嬉しく思います。このセミナーでは、現代を生きる私たちが精神面・肉体面でよりバランスの取れた生活を送

れるよう、著名なヨーガの指導者による霊的な気付きの場となる種々のセッションが準備されており、ヨーガの様々な面について改めて深く考えることができます。

セミナーの成功を心よりお祈り申し上げます。」

このイベントの後、マハーラージは上海に移動しました。14日（火）、インド人グループの夕食会で「ポジティブな生き方」について講話を行いました。これは、現地在住のインド人で会社役員の方の Alarka Kundu さんのご招待によるものでした。15日、日本に帰国しました。



忘れられない物語

『スワミー・ヴィヴェーカーナンダの思い出』（スワミー・ボダーナンダ著）より

ある日、私たちはスワミーと一緒ガンジス川沿いを散歩していた。ドッキネッシュル寺院の前に来た時、スワミーはシュリー・ラーマクリシュナについて話し始められた。スワミーが師についてお話しになるのは非常に稀であった。師の話をされようとするといつも、感情が高ぶって話をすることが出来なくなられたからだ。

この日、スワミーは、自分の内側はすべてが信仰心、外側はすべてが知識だが、師はその正反対だった、と仰った。そして、親しみとユーモアを込めて言われた。「私には将来の成功が約束されていたというのに、無学なブラーミンの祭司への愛の奴隷となってしまったせいで人生を棒に振ってしまった。」私には、スワミーがどれほど師を愛しておられたか、到底理解できない。スワミーは、師をアヴァター（神の化身）だと言われることも、アヴァターとして世に広めようとされることもなかった。「師がアヴァターなのかそれ以上の存在なのか、私は知らない！」とよく仰っていた。師を言葉で表すことは十分ではな

く、師の偉大さを矮小化してしまうのだ。

スワミーは兄弟弟子に対して特別な愛情を持っておられた。シュリー・マハーラージ（スワミー・ブラフマーナンダ）を限りなく尊敬していらしかった。コルカタのマールワリー人（注1）らがベルル・マト内のガンジス川の土手でピクニックをしていた。土手沿いに夕方の散歩をしていたスワミーは彼らのところに来ると、皆の前でシュリー・マハーラージを指差してこう宣言された。「彼は我々のラージャ（王）だ。我々は皆彼の召使いだ。」スワミーは、シュリー・マハーラージの人柄に限りない敬意を抱かれており、シュリー・マハーラージにはラージャ・ブッディ（王の知性）があるとよく言われた。スワミーは、僧院の長になるのにシュリー・マハーラージが最適な人物であると分かっていたのだ。だから、シュリー・マハーラージをラーマクリシュナ・ミッションの初代プレジデントに任命されたのだ。

スワミーはかろうじて健康を維持されていた。間もなく終わりの時が来た。スワミーは、肉体を離れられた日、パーニニ（注2）の文法の授業を受けられた。夕方、スワミー・プレーマーナンダと散歩に行かれた。スワミーが散歩からお戻り

になった時、私たちは僧院のベランダにあるティーテーブルの周りに座っていたのを覚えている。スワージーは階段を登って行かれたが、数段降りてきて私たちに向かって言われた。「マラリアの季節が近づいている。君たちの中で蚊帳に穴が開いている者は、直してもらった方がいいぞ。」これが、私がスワージーから聞いた最後の言葉だった。スワージーは階段を上がって行かれた。その後、どのように最後を迎えられたかは、あなたも知っているだろう。

シュリー・マハーラージは、仕事で前日コルカタに出かけられていた。すぐに知らせが送られた。シュリー・マハーラージが船から降りられた時、震えていらっしやっただの覚えている。すぐに上の部屋に上がられると、スワージーの足を握り、幼い子供のようにしくしくと泣き始められた。シュリー・マハーラージは強い精神力をお持ちの方で、普段は感情に負けることは決してなかった。この時は、感情が高ぶるあまりスワージーの体を長い間抱きしめられ、力づくで引き離さなければならなかった。

(注1 ラージャスターン州マールワール地方出身の人々)

(注2 紀元前4世紀頃のインドの文法学者)

(出典：『Vedanta Kesari』1972年9月号)

今月の思想

「千里の道も一歩から」

(老子)

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp